

『蜀相』 杜甫

杜甫 波瀾万丈の大詩人

蜀相 杜甫

丞相祠堂何處尋 丞相の祠堂何れのか尋ねん

錦官城外柏森森 錦官城外柏森森

映階碧草自春色 階に映ずる碧草自ずから春色

隔葉黃鸝空好音 葉を隔つる黃鸝空しく好音

三顧頻煩天下計 三顧頻りに煩わす天下の計りごと

兩朝開濟老臣心 兩朝開き濟す老臣の心

出師未捷身先死 師を出だして未だ捷たず身先ず死す
長使英雄淚滿襟 長く英雄をして涙襟に滿た使む

盛唐の詩人、字は子美、号は少陵、七十二年玄宗皇帝即位の年、我が国では奈良時代、平城京のできた二年後、洛陽の近くの鞏（こう）という町で生まれた。父は杜閑といい、奉天（陝西省）の県令（県の長官）だった人で、家は代々地方官を勤めた。初唐の杜審言は祖父である。家庭の伝統に従って官吏になろうとし、官吏登用試験（科挙の試験）を度々受けたが落第し、その不平からか二十歳頃から三十四、五歳頃までは南方揚子江下流を旅したり、北方黄河流域に放浪の生活を送ったりした。

この放浪時期の終わり頃、李白や高適等の詩人達と親交を結び、共に手を携えて河南の辺にきままな生活を送った。天宝四、五年頃（七四五頃）放浪生活をうちきり長安に出た。政府にながしの地位を得ようと思つてのことであろうが、任官の望みは一向に叶えられず、同十四年（七五五）には安祿山の乱が起こった。杜甫は家族を鄜州（ふ）に落ち着かせ、新帝肅宗（玄宗の息子）のもとに馳せ参じるため旅に出たが、途中で賊軍に捕らえられ長安に連れ戻されて幽閉の身となった。この時「春望」が詠まれた。

翌年に杜甫は長安の脱出に成功し、その頃靈武から鳳翔（あんざいしよ）に行在所を移していた肅宗のもとへ馳せつけ、その功勞を

賞されて左拾遺（皇帝の諫官）の官を授けられ、長年の望みを初めて達した。しかしその光榮はわずか一年にも滿たずして失われ、華州（長安の東）の地方官に左遷され、それも一年ばかりで華州地方の大飢饉にあつたため食料を求めて家族と共に甘肅省の秦州に向かつて旅に立った。

乾元二年（七五九）成都へ到着した。気候も暖かく物資も豊富で又幼なじみの嚴武や、放浪時代の友人高適等がこの地の高官で、杜甫は親戚や友人たちの援助を受け、翌、上元元年（七六〇）春には、成都の郊外の浣花溪に草堂を建てて六年ほどは家族と共に幸福な生活であつた。この六年間は杜甫の一生のうちで最も安定した時期であつた。「蜀相」は杜甫が四十九歳、草堂を建てた年に詠まれた。春に諸葛孔明の廟に参拝し、彼を懐かしみ賦したのである。

杜甫は永泰元年（七六五）の春成都を去り揚子江を下り、四川省の夔州（き）で二年ほど生活した。大曆三年（七六八）の春再び舟で揚子江を北上して故郷の長安に帰ろうとしたが、長安の辺は軍閥の叛乱とチベットの侵入が絶えないので帰れなかった。以後二年の間、湖北、湖南の両省をさまよい生活していたが、大曆五年（七七〇）の冬、湖南の柏江（はく）の舟の中で病で亡くなった。五十九歳だった。

意 解

蜀の丞相諸葛孔明を祀った廟はどこに尋ねたらよいだろう

うか。成都城外の柏の木々がこんもりとしげっている処がそれだ。

祠堂のきざはしに映じている緑草は、丁度春で春景色を呈し、葉かげで鳴くうぐいすは、空しく美しい声でさえずるばかり。

昔劉備は三度も孔明を尋ねて、天下を治める策を尋ねた。これに感激した孔明は、劉備・劉禅二代にわたって老臣の忠誠をつくした。しかし魏討伐軍を出してまだ戦いに勝たないうちにその身は先に死んでしまい、長く後世の英雄をして痛恨の涙を流させるのである。

諸葛亮 天下三分の計

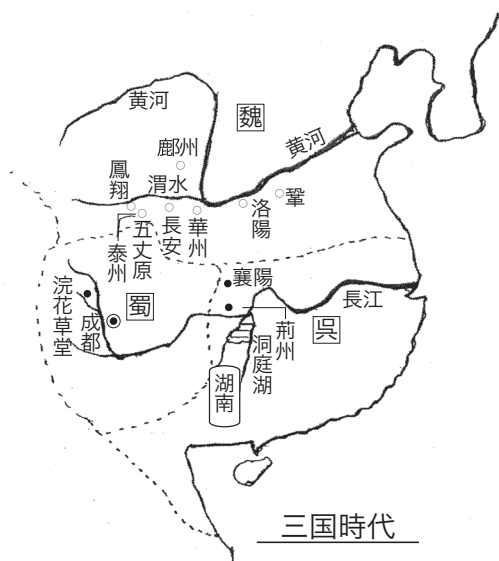
▽「臥龍」と呼ばれた孔明

字は孔明、琅琊国陽都（山東省沂南の南）が諸葛氏の土地、祖は漢の司隸校尉諸葛豊である。もともとは単姓の葛氏であった。琅琊諸葛（山東省諸城の西南）に住んでいた一族が南の陽都に移り住んだ。ところが陽都にも葛姓があったので、人々はこれを区別するために諸葛から来た葛氏を諸葛と呼ぶようになったという。父珪の死後十三歳の時叔父の諸葛玄に引きとられ叔父のいる荊州に向かう途中（二九三）曹操の徐州一帯で大虐殺を行った凄まじさを見て、心象風景となり彼の心に深く沈澱していった。叔父の諸葛玄が病死、十七歳のとき襄陽の西の隆中に弟と移り住

んだ。草庵を結び晴耕雨読の生活を送りながら、そのたぐいまれな経綸即ち天下を治め整える力を養った。そして「臥龍」と呼ばれるようになった。

▽「三顧の礼」に応えた孔明

客将として荊州に身を寄せていた劉備が、臥龍と呼ばれる賢人のいることを耳にしたのは新参の臣徐庶の口からであった。徐庶は諸葛亮の学友である。三顧の礼に応えて諸葛亮（孔明）は自分の住まいしている草庵を出たとされる。三顧の礼についてNHKカルチャーアワー東西傑物伝で放送された作家伴野郎先生は、「現在中国の史学界では三顧の礼は表現の誇張であるとしている。劉備が諸葛孔明を訪問したことは史実として認められる、また諸葛孔明の出師の表のなかでも三度尋ねてくれたと表現している。だが当時の三度は数多くとかその熱意を



示す語に解すべきである。」と述べられている。

天下三分の計は諸葛孔明が劉備に説いた魏・呉・蜀の三国が領土を三分して治める計である。諸葛孔明は劉備が始めて得た頭脳であり、謀臣であった。その信頼度はきわめて大きかった。孔明二十七歳、二〇七年であった。孔明は丞相になると民衆を慰撫し、踏むべき道をふみ、官職を少なくし時代にあった政策に従い、誠心を開いて公正な政治を行った。領土内の人々はみな彼を敬愛した。

▽「出師の表」に国運を託した孔明

孔明は二二七年関中への出陣に先立って劉禅に出師の表を奉呈した。それは『臣亮言す。先帝、創業未だ半ばならざるに、中道に崩殂せり。今、天下三分し益州疲弊す。此れ誠に危急存亡の秋なり。……』で始まる一文で、蜀の国を思い、先帝劉備と自分の出会いからいままでを述べ、先帝の恩に報いたいとして劉禅に仕えたいことを奏書した。劉備が臨終に「劉禅が不肖の子ならば君が蜀漢の帝位につけ」と遺詔を与えたことは禅も知っていた筈であり、禅としては不安を抱いたであろう。その不安を解消するために孔明は、あくまでも劉禅の臣として仕えることのみを本願とし、魏の支配する地、北伐遠征軍の司令官とみずから規定し、禅に代わって帝につく考えは決してないと言言しているのである。孔明の真心からの

決意でしたためられている。

▽「巨星落つ」と人々をうならせた孔明

二三年渭水南の台地、五丈原の陣中で病を得て亡くなった。享年五十四歳、臨終の時赤く尖った星が東北より西南に流れて孔明の陣営に落ちたという。

鑑賞

蜀相はいうまでもなく三国蜀の丞相諸葛亮のことである。諸葛武侯祠（孔明を祠る廟）を尋ねたとき、これを弔って賦したもので、唐の上元元年（七六〇）の春、杜甫四十九歳の作である。

▽無念の軍師を惜しみ称える杜甫

この詩は七言律詩の典型の整然とした詩である。前半は、成都城外にある諸葛孔明を祀った廟は木々がこんもりと茂り、祠堂の階段に緑色を映じている草は、今の季節春を呈し、葉がくれにさえざる驚は空しくよい音色であると、眼前の景を賦している。

後半は、昔、蜀の劉備が三度も頻繁に孔明を尋ねて、天下を治める策をたずねた。孔明はこれに心を動かされて劉備・劉禅の二代にわたってつかえ、創業（国を新しくつくる）守成（国を安定維持する）して老臣のまことを尽くした。しかし、魏討伐軍を出して未だ戦いに勝たないうちに病に

倒れその身は先に死んでしまった。と孔明生前の事跡をたたえ、杜甫の感慨を賦している。

孔明が出師の表を奉り、魏討伐軍を出したのは二二七年で、杜甫がこの詩を賦した七六〇年だから実に五三三年前のことである。だが我が国でも八〇〇有余年も前の源義経を立派な武将、だが憐れな人生だと義経をしたい、応援したい「判官びいき」の心情を誰しもが持っているようなもので、杜甫は孔明を尊敬していたといわれる。成都郊外の草堂で家族と安泰な日々をすごしていた春の一日、尊敬している諸葛武侯祠をおとずれ、三国時代の歴史をふり返り、その当時のことや孔明の活躍に思いをめぐらしたことだろう。

石川忠久先生の「漢詩鑑賞辞典」で杜甫は孔明を尊敬



武侯祠（諸葛亮を記念した祠堂。中国四川省成都市）

することひとかたならぬものがある。その生き方に理想の像をみたのだろうと述べられている。我が国でも中国歴代の親しまれているトップクラスの人物は孔明である。

▽土井晩翠の「星落秋風五丈原」

この詩は、明治大正の書生の血をわかせたといわれる。四十四節からなり長いので紙面の都合上、三節のみ紹介したい。

祁山きざん悲秋の風更けて 陣雲暗し五丈原
零露あやの文は繁くして 草枯れ馬は肥ゆれども
蜀軍の旗光無く 鼓角こかくの音も今しづか
丞相病あつかりき

清渭の流れ水やせて むせぶ非情の秋の聲
夜は關山の風泣いて 暗に迷うかかりがねは
冷風霜の威もすぐく 守る諸宮の垣の外
丞相病あつかりき

帳中眠かすかにて 短檠たんけい光薄ければ
ここにも見ゆる秋の色 銀甲ぎんこう堅くよろへども
見よや侍衛じゑいの面かげに 無限の愁溢うれるるを

丞相病あつかりき

この「蜀相」
の詩を読むと、
まるで自分が丞
相祠堂前に行っ
ているような錯
覚におちいるの
である。

